

## うれしかったこと

私は中学2年生で、今はちょうど定期テスト期間に入っています。けれど、親はこちらの気持ちも知らないで、いつも気楽にテレビを見ています。たまに私が気晴らしにテレビを見ようとする、「あなたは試験前でしょう。そんなことで、よい点がとれると思っているの。」「まだそこにいるの。早く、行きなさい。」などと言ってきます。

「うるさい。私の気持ちなんか何もわかってくれてない。どうせよい点数なんか期待してないくせに。」「イライラして、そう言葉をぶつけると、私は部屋から出て行きました。

ある日の授業で、家族とのふれあいについて考えました。担任の先生がこんなことをおっしゃいました。

「最近家族のことでうれしかったことといえば、どんなことがありましたか。」

「そんなの何一つないわ。」私は心の中でそうつぶやいていました。

先生はさらに続けて、

「逆に、自分がイヤになって、どんよりした曇り空のような気持ちになったり、イライラして、嵐のように周りの人に気持ちをぶつけてしまったりしたことはありませんか。今日はそんな気持ちを一度思い出して書いてみましょう。」

「こっちの方だったら、いくらでもあるわ。」私は、配られた用紙に、先日の親との会話のことを書きました。

その後、同じ班の友だちと書いた内容を交流しました。その時、Aさんが私と同じように家族と激しく口論したことを書いていたのでびっくりしました。Aさんといえば、穏やかな性格で周りの人にもいつも親切な人です。家族に対してもあまり感情をストレートにぶつけるような人ではないと思っていたので意外でした。

また、ほかの人も自分とよく似たことを書いていました。家族に対して不満を持っているのは自分だけじゃないんだと思うと、なんとなく気持ちが楽になりました。

その日の帰りの会で、テストの結果が渡されました。結果はというと、がんばったつもりでしたが、思ったほど点数には表れていませんでした。「がんばったのに、どうして・・・」と思いました。その日、家に帰ってテストの結果を親に見せました。

「これを見せたら、怒られるだろうな。」そんな思いでした。

すると母が一言、「悔しいなあ。」と言いました。

怒られるに決まっていると思っていた私は、母の言葉に少し驚きました。

「この間、あなたがテレビを見ていて、私が注意して言い合いになったことがあったでしょ。実は、しばらく時間をおいてから、もう一度言わなければと様子を見に行ったら、疲れて机の前で寝ているあなたの姿が見えたの。机の周りには、大事なことを覚えようと紙がいくつも貼ってあった。自分で考えたテスト勉強の予定表もあった。ベッドには朝起きるためか、目覚まし時計がいくつもあった。私はだんだん、怒る気持ちが失せてしまったの。自分なりに考え、頑張ろうとしていたんだね。」

さらに、母は続けました。

「自分が子どもの時は、『頑張っても結果が出ないことはある。』と親に言い返していたのに、自分が親になって、自分の子どものテストとなると、点数のことばかり気にしている。あなたのいろいろな思いや頑張りを、もっともっと分からないといけないね。」

中学生になってからは、母の仕事が忙しくなったこともあり、じっくり話をしていませんでした。だから、自分の子どもの頃の話までし、しかも私のテストの結果を「悔しい」と言ってくれたことは、本当に意外でした。また、今も私のことを気にかけ、もっと分かりたいと思ってくれていることを知り、胸が熱くなりました。

この後自分の部屋に戻った私は、カバンから今日の授業のプリントを出しました。そして空欄のままだった「うれしかったこと」の欄に、『母が私にいろいろ話してくれたこと』と書き入れて、大切に引き出しにしまいました。